令和４年度（2022 年度）市町村職員国内先進事例研修　研修先の概要

研修①　福島県富岡町：東京電力廃炉資料館

⑴　町の概要

人　口：11,871 人

世帯数：5,665 世帯　　（町内居住者 2,026 人、1,430 世帯）　　※令和４年８月１日現在

⑵　研修テーマ　東日本大震災による福島原子力事故の事実と廃炉事業の現状

「東京電力廃炉資料館」は、東日本大震災で被災した「福島第一原子力発電所」から南に約９㎞の富岡町にあり、原子力発電の学習施設であった「エネルギー館」を震災後「廃炉資料館」と改めた。

原子力事故の記憶と記録を残し、二度とこのような事故を起こさないための反省と教訓や事故の事実と廃炉事業の現状等を広く世間に発信するため、平成３０年１１月に東京電力 HD により開設された施設である。長期にわたる膨大な廃炉事業の全容を見える化し、その進捗をわかりやすく発信することで、復興に向けた安心につなげることを目的としている。

研修②　福島県大熊町：中間貯蔵工事情報センター

⑴　町の概要

人　口：10,061 人

世帯数：4,792 世帯　　（町内居住者 389 人、町内 328 世帯）　　※令和４年８月１日現在

⑵　研修テーマ　除去土壌などの安全な輸送、処理・貯蔵、再生利用の取組

「中間貯蔵施設」は、大熊町と双葉町にまたがる敷地面積 1,600ha の施設で、福島県内の除染で発生した土壌等を最終処分するまでの間、安全かつ集中的に貯蔵するための施設である。

「中間貯蔵工事情報センター」は、環境省から委託を受けて「中間貯蔵・環境安全事業株式会社（JESCO）」が運営している施設であり、中間貯蔵施設工事（特に除去土壌等の輸送や施設整備工事）について、その概要や工事の進捗状況、安全への取組等を紹介している。

「中間貯蔵施設」の役割は、除去土壌等の受け入れ、分別、保管、減容だけでなく、汚染土壌の再生利用にも取り組んでおり、農地での再生利用実証事業等も行っている。

今研修では、工事の概要等の説明を受けたのち、福島第一電子力発電所周辺の中間貯蔵施設区域内をバスで周回（一部降車）し視察を行う。

研修③　福島県双葉町：東日本大震災・原子力災害伝承館

⑴　町の概要

人　口：5,574 人

世帯数：2,175 世帯　　※令和４年７月３１日現在

◎東日本大震災による原子力事故の後、町の全域に避難指示が出されすべての住民の避難が続いていたが、今年の８月 30 日に帰還困難区域の一部について避難指示が解除された。それに伴い、役場の機能を９月５日から町に戻し、新庁舎での業務が開始している。

⑵　研修テーマ　東日本大震災からの復興の現状、課題と防災・減災の取組

令和２年９月に開館した「東日本大震災・原子力災害伝承館」は、(公財)福島イノベーション・コースト構想推進機構が福島県から指定管理者として指定を受けて管理運営を行っている施設であり、復興に向き合ってきた「証」をアーカイブ（資料）として収集や保存、展示している。展示や研修を通じて、未曽有の複合災害について福島で何が起き、どう向き合ってきたかを伝え、防災・減災に向けた教訓を国内外や未来へつなぎ、学びを「他人事」から「自分事」へ深めることを目的としている。

今研修では、施設の見学と被災地域をバスで訪れる「フィールドワーク」を実施し、その後の「ワークショップ」で復興の現状・課題について感じて学んだことを整理・共有し、自分の住む地域や社会全体の課題解決へつなげることを目的とする。

研修④　福島県浪江町：水素エネルギー研究フィールド

⑴　町の概要

人　口：15,805 人

世帯数：6,701 世帯　　（町内居住者 1,903 人、1,175 世帯）　　※令和４年７月 31 日現在

⑵　研修テーマ　再エネを活用した水素製造拠点と浪江町における水素利活用の取組

「水素エネルギー研究フィールド（ＦＨ２Ｒ）」は、令和２年３月に開所した再生可能エネルギーを利用した世界最大級の水素製造拠点であり、製造した水素を貯蔵・供給している施設である。

浪江町では、「なみえ水素タウン構想」と合わせてゼロカーボンシティに向けた取組を進めるため、様々な分野において水素利活用や実証を積極的に推進している。「道の駅なみえ」への電力・熱源の供給や燃料電池自動車の公用車導入、マルチ水素ステーション整備に向けた調査研究、脱炭素と水素利活用のツーリズムなどの取組のほか、水素利活用に関する連携や普及啓発も行っている。